

第五福竜丸展示館で若い世代に伝えるとりくみ

安田 和也

はじめに

ビキニ水爆実験で被ばくした遠洋マグロ漁船第五福竜丸を保存展示する東京・夢の島の都立第五福竜丸展示館は、2001年6月に開館25年目を迎えました。第五福竜丸の保存は、広島・長崎の被爆体験とビキニ水爆実験による3度目の被ばくからひろがった原水爆禁止の運動と世論を背景に実現したわけですが、21世紀、展示館が四半世紀を経たそのときに、第五福竜丸が果たす役割、ふさわしいとりくみとはなんだろうか、問い直してみました。



第五福竜丸を知らない世代へ

第五福竜丸展示館は都立夢の島公園にあり、ここは東京のゴミの埋立でできた場所です。第五福竜丸は、被ばくしたのち文部省により「学術研究資料」ということで買い上げられ、東京水産大学の練習船「はやぶ

さ丸」として使われました。1967年に廃船処分となりこの埋立地の海面に放置されますが、この船が、ビキニ水爆実験の被災船「第五福竜丸」であることが知られ、保存を求める声が起こります。保存委員会がつくられ、世論のひろがり背景下に、東京都が、船の寄贈を受けて展示館を建設することになり、公園化がすすめられていた夢の島に1976年にオープンしました⁽¹⁾。公園内には総合体育館や熱帯植物館、競技場、バーベキュー広場などが併設され、お台場や葛西臨海公園、ディズニールランドにはさまれて都民の憩いの場となっています。

休日には、とくにバーベキュー広場が若者たちや家族連れでにぎわいます。行楽の人たちはお腹がいっぱいになると、退屈しはじめた子どもの手を引いて展示館にやってきますが、ここが何の施設か、これが何の船かを知らずに来る方が意外と多いようです。館に入ると目の前に大きな第五福竜丸の船尾がそそりたっています。子どもたちだけでなく多くの若者たちも「ワー！ナニこれ」「でけー」「本物かあ」などと感嘆の声をあげます。「これなあに？」と子どもに問われて若い親が首をかしげる、という光景をしばしば見かけ⁽²⁾るのです。

第五福竜丸が被ばくしてから50年近くが経ち事件以後の世代が国民の多数を占めるもつで、「知らない」ことは当然のことかもしれません。逆に、船の実物が保存展示されている今日的意味を考えずにはいられません。実物があるからこそ、これを通じて事件を伝え、23人の乗組員のこと、国民的な放射能への恐怖、マーシャル諸島の住民の被害、核実験が人類にもたらしてきたことを知らせる契機となり得るのです。



ボランティアの会をつくる

「第五福竜丸を知らない世代に伝える」、これが21世紀を迎えた展示館の第一の課題であろうと思います。こうした点でまず展示内容・解説が初めて見る人にわかり易いものになっているのかどうかを見直さなければなりません。

つぎに、団体に訪れる小中学生のなかには落ち着いて展示を見るとか、解説を読むことができなかったり、見学の十分な時間が持てないことがあります。そこで、展示館から第五福竜丸について「知って欲しいこと」を語りかける必要性を感じました。といっても年間をつうじて学校の団体見学が400以上もあり、一般も100以上あるというなかで少ない職員だけではガイドの対応は不可能です。そこで、ボランティアガイドを組織して会をつくることにしました。

これまでもガイドボランティアの必要性は提起されていたのですが、実現にいたらなかったのです。しかし今日では、かなりの博物館や美術館でもボランティアスタッフの活動が一般化しています。幸いなことに、福竜丸がゴミの島の海面で傾き、いまにも沈みそうになっていたときに、保存運動のなかで奔走した江東区の教員(沈みかかった船から泥水をかいだした・・・)が定年を迎える年代になっており、この方々の力を得て2001年4月にボランティアの会を発足させることが

できました。⁽³⁾

ボランティアガイド養成にあたり、まず案内・説明をするテキストづくりから始めました。第五福竜丸展示館には小中高生の修学旅行や社会科見学で年間450校余りがやってきます。一団体に15分から20分の説明(「展示館からのお話」と呼んでいる)をおこない、その後に自由に見学します。もちろん人数が少なく時間に余裕のあるときには一緒に展示物を見ながら回ることもあり、その場合は40～50分かかります。団体といっても5、6人から200人以上まであり、また、来る途中の交通渋滞で到着したら出発予定時刻になっていた、ということも起こるのですが、どんなに短くとも福竜丸についてこちらから語りかける時間をとっていただく。これをおこなうかおこなわないかで、船にたいする理解や船を心に受け留めることに大きな違いがあることが感じられました。ガイドとあわせてボランティアには、資料整理や展示作業を手伝ってくださるメンバーもできました。

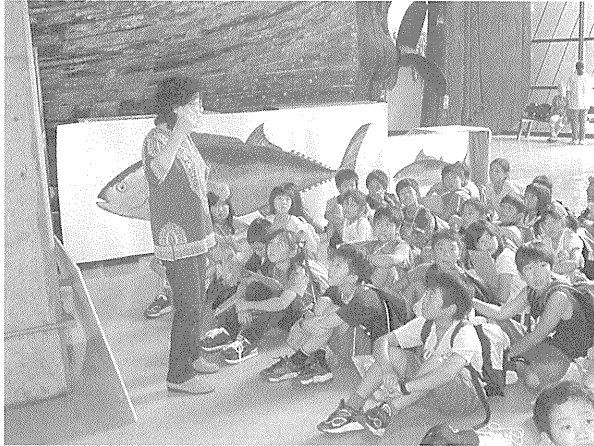
こうして、来館する団体のほぼ9割に「展示館からのお話」をすることができるようになりました。また休日の午後の時間帯のガイドツアーの実施や個人でも希望があれば、来館された方への案内に応じられるようになってきています。

幼児から高齢者まで

夢の島公園には、お天気の良い昼間、遠足で幼稚園・保育園の可愛い園児たちもやってきます。この子らにも「お話」をさせていただきます。そこで、年齢、学年にあわせた「説明の中身、話し方」をつくる必要になりました。

まず小学校の中学年以下は、広島・長崎の被爆についての知識はほとんどないといつてよいでしょう。また、被爆写真などをストレートに見せることも配慮が必要です。そこで、マグロを捕っていた漁船・第五福竜丸に焦点をあて、とくにいまの子どもたちはマグロをしょっちゅう食べていて馴染み深いことと結びつけました。

一方で第五福竜丸が造られた時代には、日本中の子どもたちがいつもお腹をすかせていて満足にご飯が食べられない時代だった、などということは想像もつかないわけですから、「マグロの話」を通じて第五福竜丸とその時代の一端を知ってもらうようにもしています。



ここで登場するのが大きなクロマグロのイラストです。これは夜間中学の美術の先生が描いてくれました。体長2・5メートル、重さ200キロを超えようかというクロマグロは子どもたちの驚嘆の的です。ただし、第五福竜丸はクロマグロは捕っておらず、おもにメバチ、キハダ、ビンナガでしたのでこの説明もします。またツナやシーチキンサラダがマグロであることも子どもには驚きのようです。さらに時間があればマグロの習性や延縄漁についてもイラストを掲げながら説明します。子どもたちはマグロを食べるときに船のことを思い出してくれるかもしれません。

「展示館からのお話」は、小学高学年、中学、高校と上の学年になるにつれて、水爆実験被ばくについての内容に重点を移し、海洋汚染、マーシャルの被害などを加えていくように構成しています。また、船の保存の経緯についても、とくに年配の見学者などビキニ事件の記憶がある年代にはお話ししています。

展示館から近い江東区立辰巳小学校の朝生雅子先生は、次のように展示館の様子を紹介しています。

先日私は、1・2年生の春の遠足で夢の島に行きました。一年半ぶりに訪れた展示館は、多少展示内容が変わっていました。説明で使われたマグロの実物大の絵は迫力があり、低学年でも興味を持って話を聞くことができました。第五福竜丸は、年齢に応じた色々な学び方ができるとおもいます。（『平和教育』62号、日本平和教育研究協議会編、2002年6月）

第五福竜丸が語りかけること

第五福竜丸が来館者に語りかけるメッセージとはなんでしょうか。その第一は、もちろん水爆実験により「死の灰」をあげたこと、それが人間に及ぼした被害についてです。久保山愛吉さんをはじめ23人の乗組員の人生を変え、原水爆の恐ろしさを改めて国民的に知

らせたこと、マーシャル諸島民の被害や世界の核実験、核兵器問題へと広がっていきます。それは過去の事件であるばかりではなく、いまにつづく被害、今日の核問題を考えることでもあります。

船は、久保山さんの遺した言葉、「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」、この願いがいまもかなえられていないことに想いをいたらせ、問いかけつづけるのではないのでしょうか。毎日、多くの子どもたちの前に立つ私たちも、子どもたちの父親とほぼ同じ年代で突然水爆実験に遭遇して死ななければならなかった「久保山さんの死」の命の重みを心のなかに留めてほしいと願って語りかけるのです。

福竜丸が語るもう一つのことは、遠洋マグロ漁船であること、そしてその時代についてです。船はアジア・太平洋戦争の敗戦から立ち上がる国民の食料、タンパク源を供給するために建造された木造漁船の一つであり、占領下での漁業制限や遠洋へと勇躍した歴史をもちます。おそらく、終戦直後につくられ遠洋へと活躍した木造漁船で残されているのは福竜丸一隻ではないのでしょうか。こうした点からも、「大きな木の船」をつうじて、その時代をつたえることは大切なことだと思います。

初めての夏休みイベント

展示館で、若い世代に積極的に伝えるとりくみをすすめるなかから、今年の夏休み期間に「体験学習会」をおこなおうとの企画がもちあがりました。ボランティアスタッフの発案で、「牛乳パックでつくる第五福竜丸」を平和協会とボランティアの会との共同開催でおこなうことにしました。準備をすすめるなかで、カッターを使いこなせる年代はいくつぐらいか、床に座るのとテーブルとでどちらが工作に適するか、小学校高学年には放射線の話も設けようとか、議論百出ではありましたが、そこは小中学校のベテラン教員が多いので、なんとか開催にこぎつけました。7月と8月の2日間に加えて、生活協同組合の母と子の夏休み平和ツアーの企画としても行うこととなり、全部で79名の子どもたちが参加をしてくれました。

会をはじめに第五福竜丸を知ろうというお話と見学、高学年には放射線のお話と「はかるくん」（簡易放射線測定器）を使つての船体や「死の灰」、地面の測定。つづいて工作・第五福竜丸づくりに移ります。5、6人の児童に1人のボランティアがつき、また「平和のための埼玉の戦争展」で第五福竜丸コーナーを作った高校生たちが応援に駆けつけてくれたりで、全員

が船を完成させ、展示館の裏庭に急ごしらえしたビニールプールで進水式です。ちゃんと浮んで走ったときには、歓声もありました。

また、今年は昨年以上に、連日、宿題や課題をもった小中高生が展示館を訪れてくれました。「総合学習」との関連があるのでしょうか。先生から、夏休みに博物館や美術館のいくつかが提示されて、訪問レポートを書くというものが多かったようです。私たちもさっそく「夏の自由研究のためのメモ」を作製し提供することにしました。そこには、見学して考えをまとめたほしいいくつかのテーマを出し、福竜丸の歴史、時代背景、水爆実験の被ばく、マグロの話などの概略を記したもので喜ばれました。

協力・交流の輪をひろげたい

こうしたとりくみをつうじて、最後にいくつか今後の課題や期待を述べてみます。

一つは、平和教育をすすめる教員や研究者との交流や情報交換です。展示館を活用くださる学校の先生方のとりくみなどについて、日常の学習や事前学習のなかで福竜丸をどのようにとりあげ、あるいは広島・長崎をどのように学習しているのか。この内容は、「展示館からのお話」を組み立てるうえでも参考になるものです。

学校 5 日制のもとで、学習時間が物理的には少なくなっているなかでのとりくみや工夫などをうかがいたいと思います。展示館に来る学校のなかで事前学習のために作製したテキストなどは提供をおねがいし、事後学習でのレポートや感想文、報告の新聞やニュースなどもお送りくださるよう依頼しています。

二つには、平和学会や今回の戦跡保存ネットワーク全国シンポジウム、あるいは平和のための博物館市民ネットワークなどを活用して、平和教育や平和博物館での実践報告、討論・交流などの積極的な機会にした

いということです。博物館や資料館といっても、その規模、運営形態、活動内容は実にさまざまですが、第五福竜丸展示館での少ない経験などからも、他の館でどのようなとりくみをしているか、素晴らしい成果もあればいろいろな悩みもあると思うのです。これを実際に現場で携わっている方々が集まり、専門家の助言なども得ながら、報告や意見交流の場をつくっていくことは、それぞれのとりくみを励ますことにもなり、また、内容を向上させていく上でも有効ではないでしょうか。

最後に、第五福竜丸は2004年に被ばくから50年を迎えます。ビキニ事件と第五福竜丸被ばくの総合的な記念のプロジェクトの構想を練っているところですが、このとりくみをつうじて、若い世代へのアプローチをさらにすすめ、展示館を訪れる人びとへの福竜丸からのメッセージを発信してゆきたいと思います。これからのみなさんのお力添えやご協力をお願いします。

《注》

- 1 第五福竜丸展示館は東京都の施設であるが、その管理と運営は財団法人第五福竜丸平和協会がおこなっている。平和協会は、1969年に発足した第五福竜丸保存委員会を継承して船の保存運動をすすめるために1973年に東京都認可の財団法人として設立され、展示館完成後は都から業務委託を受けている。
- 2 展示館の年間来館者数は約12万人で、うち30歳以下が約4万人である。
- 3 ボランティアの会は江東区の社会福祉協議会のボランティアセンターに正式登録し、区や都からの助成なども受けられるようにしている。夏のイベントでは、都の生涯学習活動の支援として都社会福祉協議会のボランティア・市民センターから補助金を受けた。

* 第五福竜丸展示館のホームページ<http://d5f.org/>

(筆者 第五福竜丸平和協会事務局長／展示館学芸員)